

# 実際に「音で遊べる ワークショップ型上映会」を やってみた結果

上映会の開発後、  
実際に3つの  
障害者福祉施設で  
「音で遊べる  
ワークショップ型  
上映会」を  
実施しました。  
それぞれの上映会で  
実施内容をどのように  
調整したのか、  
その特徴を  
ご紹介します。

## 実施スケジュール

2023年10月18日 浅間学園

2日間の実験を元に上映会を開発し、  
基本型を実施

2023年11月9日 木もれ陽の里

3か所の施設から多様な人びとが  
集まり上映会に参加

番外編 2023年11月19日 まるっとみんなで映画祭  
2023 in KARUIZAWA

映画祭に参加した一般参加者と  
障害のある方が一緒に実施

2024年1月 川口太陽の家

コロナ感染拡大  
により中止

実施日の2週間前から  
鑑賞する機会を儲けて準備

番外編 2024年2月7日 こびあクラブ+  
ライト学童保育クラブ

障害のある子供たちの  
放課後デイサービスと  
学童保育クラブの交流を含む上映会



## 浅間学園

【実施日】  
2023年10月18日

【会場】  
社会福祉法人育護会 浅間学園

【参加者】  
浅間学園利用者

【年齢層】  
20～80代、平均5,60歳

【参加人数】  
約20名

【障害内容】  
軽～中度知的/発達/精神障害  
若年層入所者は  
重度知的障害・自閉傾向の方が多い  
他、統合失調症、身体障害、  
聴覚・視覚障害(中途)

【ファンリテーター】  
栗田結夏

【上映作品】  
『大怪獣ブゴン』『PAPER?/かみ?』

## 施設へのヒアリングをとって得られたポイント

施設利用者のほとんどが児童期からの入所のため、集団生活のなかで個人の特別感を感じていない人が多い。そのため、ゼロからなにかを選んだり、自分を表現することが苦手な方が多く、自由にやっていると勤めてもむずかしい。

## 劇場をつくるラボのアプローチ

小さな選択肢を用意するため、楽器づくりからワークショップに取り組みます。

浅間学園さんは、上映会開発から協力いただいたので、上映会プログラムの基本型にもさまざまな影響を与えています。浅間学園さんで開発のためのプレ実施をさせていただいたとき、参加者の方から積極的に音を出してもらうことがなかなかできなかったんです。理由を考えると、ふだんの生活から自分を表現する機会が少ないから、自由にやると言われてもどうすればいいかわからないのではないかとのご意見をいただき、『楽器づくり』からこのワークショップをスタートすることになりました。

カプセルに豆を入れるのか？ 米を入れるのか？ 楽器づくりをとってそういった小さな選択肢を設けて、自由に選択することのきっかけをつくることで、自分を表現することが苦手な方でもスムーズに音を出してもらえるようになりました。



## 施設へのヒアリングをとって得られたポイント

施設の利用者同士でコミュニケーションをとっていることがあるが、職員からは言語的には読み取れないけれど、とても楽しそうで、アートのだと感じる。コミュニケーションや鑑賞をとって、なにかの刺激に呼応することを大切にしたい。

## 劇場をつくるラボのアプローチ

ワークショップ終了後に、リラックスした状態で映像を上映する時間を設けます。

言語として読み取れないとしても、言葉を使わないコミュニケーションや反応はとても豊かなものです。そうしたコミュニケーションの時間を大切にするために、ワークショップ終了後の『余白の時間』を設けることにしました。リラックスした状態で鑑賞することで、自由におどいたり、ふだんとは違う行動が見られることがありました。

利用者さんのなかに、どんな人が相手でも同じセリフを話しかけつつける方がいらっしゃいました。その方はこのワークショップに参加されると、まわりの音に刺激されたのか、置いてあった木の棒を持ってふだんしないポーズをとったんです。その人にとってある意味で新たな“表現”が引き出された瞬間だったと思います。



## 福祉施設からの声

社会福祉法人育護会  
浅間学園 施設長  
—  
原田修さん

浅間学園ではワークショップ型上映会の開発から取り組んだので、企画する側のアクションの重要性に気付かされました。参加者の視点とニーズを大切にしながら企画の方向性を練り、実験的な要素や可能性を導きだしながら評価する方法まで、さまざまな学びがありました。

上映会終了後、利用者さんのなかには「今度いつ来るの?」「次回はいつ?」と次を楽しみにしている方もいらっしゃいました。この上映会は単なる映像の鑑賞会であるだけでなく、出会いの場でもある企画なのだと感じます。

今回の企画をとおして、今後の事業所運営に関しても大きなヒントをいただいた機会でした。小さなミーティングの積み重ねと振り返り、そして時間をいかに活用するかということは、日頃からおこなっている支援でも同じように大切です。利用者だけでなく職員も実験的な試みを楽しむことができ、まずは提供する側が楽しむという基本姿勢をあらためて認識させていただきました。重要なのは関係性であり、私たちは笑顔でつながることができる。私自身、とても楽しんで参加できたことに感謝しております。



### 木もれ陽の里

【実施日】  
2023年11月9日

【会場】  
木もれ陽の里

【参加者】  
社会福祉法人育護会 浅間学園利用者  
社会福祉法人愛泉会 軽井沢保育園利用者  
軽井沢町地域活動支援センター利用者

【年齢層】  
20～60代

【参加人数】  
約40名

【障害内容】  
軽～中度知的/発達/精神/身体障害

【ファシリテーター】  
栗田結夏  
サブ:佃梓・馮馳(NPO法人リベルテ)

【上映作品】  
『大怪獣ブゴン』

施設へのヒアリングをおして得られたポイント

いつも顔を合わせてる施設のメンバーだけでなく、外部の人たちと交流したい。



劇場をつくるラボのアプローチ

複数の福祉施設との合同開催にします。

複数の福祉施設利用者が参加する合同開催のワークショップとしました。いずれのワークショップでも各施設の職員さんにも一緒に参加してもらっていますが、参加人数が多く、またはじめて出会う他施設の方との交流を考慮して、この回では障害のある人とのアートに関するコミュニケーション経験が豊富なNPO法人リベルテの佃さん・馮さんにもサポートに入ってもらいました。

サードプレイス（ふだん生活している場所や職場、学校とは異なる、カフェや公園のような居心地のよい第3の居場所）の重要性がよく語られますが、障害のある人にとってそういった場所にアクセスできることは少ないのではないかと、この合同開催を計画しながら感じました。『音で遊べるワークショップ型上映会』は、障害のある人にとってのサードプレイスのような場所になれる可能性があるのではないのでしょうか。



施設へのヒアリングをおして得られたポイント

アート活動をふだんの施設での日中生活で実践しているが、マンネリ化してきている。表現の幅を広げたい。



劇場をつくるラボのアプローチ

日常では目にする機会のすくない映像作品や楽器を用意することで、創造性を触発させることができます。

ワークショップでは、なるべく創造性を触発させられるような映像作品を上映します。映像鑑賞がインプットになるので、ふだんとは異なる刺激があると思います。また、この回ではサポートに入ってもらったNPO法人リベルテの馮さんが自作されている楽器を持ってきてもらいました。ブリキの大きな箱など、シンプルだけど楽器のバリエーションが増えることで、表現できる音の種類が変わって、いろんなことを表現してみようと想像するきっかけになりました。



## 福祉施設からの声

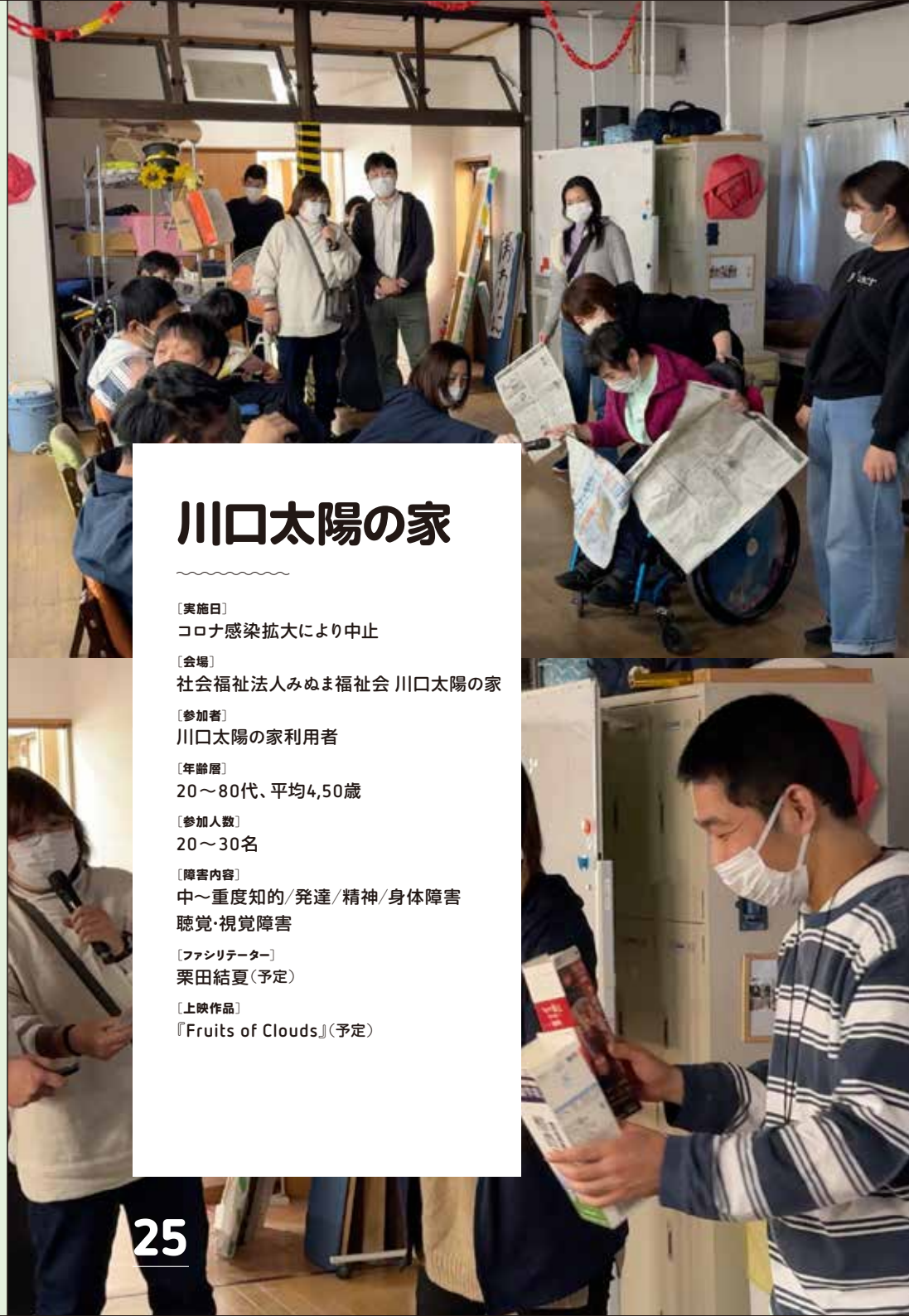
施設利用者  
—  
水上さん

僕たちみたいに施設の中で暮らしていると、地域の人との交流が少なくなって閉じこもりがちになるから、この活動をもっと地域に開いて実施してほしいと思います。外に行くのはやっぱり気晴らしになるよね。ぜひそういう機会をよろしくお願いします。

軽井沢保育園支援員  
—  
原田さん

音楽が好きな利用者さんが多いので、今回のイベントはとてもよい体験になりました。音楽や映画は、「楽しい」に繋がるという意味で大切だと思います。外に出ていろんな方たちと一緒に楽しむ機会はコロナで少なくなっていたので、これをきっかけにこういう機会が増えていくと、利用者さんも豊かな体験ができると思いますし、「楽しい」を沢山のひとと共有できるといいですね。

~~~~~  
ふだんはひとりでラジカセで音楽を聞いている利用者さんがいるのですが、今日はみんなで音を楽しむということで、ここぞとばかりに自分を表現して楽しんでいました。身構えることなく、こういう機会を続けてくれたらいいなと思います。



## 川口太陽の家

~~~~~  
【実施日】  
コロナ感染拡大により中止  
【会場】  
社会福祉法人みぬま福祉会 川口太陽の家  
【参加者】  
川口太陽の家利用者  
【年齢層】  
20～80代、平均4,50歳  
【参加人数】  
20～30名  
【障害内容】  
中～重度知的/発達/精神/身体障害  
聴覚・視覚障害  
【ファシリテーター】  
栗田結夏(予定)  
【上映作品】  
『Fruits of Clouds』(予定)

施設へのヒアリングをおして得られたポイント

鑑賞=じっとして観るもの、というイメージが強いので、それを変えたい。



劇場をつくるラボのアプローチ

事前準備として、上映予定の映像を当日の2週間ほど前から  
ふだんのレクリエーションのなかで鑑賞する機会を設けます。

ふだんからアート活動は実践されているものの、作品を鑑賞するという部分には着目してこなかったということで、念入りに準備を進めていました。実際にはコロナの感染拡大によって中止になってしまいましたが、時間をかけて準備することで施設の職員さんにとっても気づきを得られる機会になったと思っています。

『鑑賞』と聞くと、静かにじっとしてないといけないんじゃないか？という既成概念があるかもしれない、それを1時間半程度のワークショップで壊すことはむずかしい可能性があったので、事前に映像を提供して、ワークショップ実施予定日の2週間ほど前からふだんの活動のなかで映像を観せてもらうことにしました。施設の名前にちなんで『太陽のなかの音ってどんな音？』という質問をして、音を出してもらったりもしていたようです。



施設へのヒアリングをおして得られたポイント

ふだんから職員が忙しいので、限られた時間のなかで、施設利用者の  
創造性を広げるために何が出来るかを考えたい。



劇場をつくるラボのアプローチ

ワークショップに関わってくれるすべての施設の方と対話しながら、  
施設利用者の新しいコミュニケーションの発見を促します。

職員のみなさんが、日々の施設運営のなかでとにかく忙しく、施設利用者の方の自己表現やコミュニケーションの仕草を職員同士で丁寧に話し合い共有する時間がないと感じられており、職員さん同士の対話が減っている状況にありました。なので、私たちが施設の外部からかわり、対話の機会を設けることで、職員さん同士の横のつながりを促進させたり、施設利用者の新しいコミュニケーションの発見につながるよう心がけました。



## 福祉施設からの声

社会福祉法人  
みぬま福祉会  
川口太陽の家

山内樹美子さん  
青木静香さん  
出来友絵さん(支援員)  
小嶋芳維さん(事業窓口)

上映予定の映像をふだんの活動のなかで事前に鑑賞し、映像に合わせて音を出してみるクイズをおこなう機会を設けましたが、ふだんはこうした取り組みに消極的な利用者が楽しんでいる姿が見られ、とても印象的でした。恥ずかしがるタイプの利用者が前に出てきて音を出したり、粗暴行為の目立つ利用者がこうした集団行動が苦手にもかかわらず積極的に参加したり。鑑賞体験ははじめての企画だったので、みんなが楽しめるかすこし不安もありましたが、職員が思っていた以上に利用者が企画の内容を理解して楽しんでいる姿に、驚きがありました。

また企画をとおして、ふだんの支援のなかでも思っている以上に擬音を使って会話や見立てをおこないながら利用者とやりとりしているな、という気付きもありました。職員間でもこうした取り組みをやってみようという話し合いをする機会が増え、職員同士のコミュニケーションの機会にもなっています。

偶然、クイズの取り組み中に中学生の職場体験を迎えていたのですが、体験の感想を聞いたところこの取り組みがとても印象に残っていて楽しかったと答えてくれました。職場体験中は利用者とのコミュニケーションがむずかしそうだったのですが、こうした取り組みがあると、障害のある人と中学生のような児童がコミュニケーションをとるきっかけにもなるのだろうと感じます。

こうした鑑賞体験や演劇といった分野でも、表現活動の一環として今後も継続していきたいと思います。

番外編

## 障害者 福祉施設 以外への展開

「音で遊べる  
ワークショップ型上映会」は、  
障害の有無だけでなく、  
人数や年齢、場所などにも関係なく、  
どこでもだれでも  
実施できるワークショップを  
目指して開発されました。  
ここでは、だからこそ  
展開することができた、  
障害者福祉施設以外の場所での  
実践事例についてご紹介します。

# まるっとみんなで映画祭2023 in KARUIZAWA

【実施日】	2023年11月19日
【会場】	軽井沢町中央公民館 大講堂
【参加者】	軽井沢町近隣の住民
【年齢層】	未就学児～70代
【参加人数】	約40名
【障害内容】	軽～中度知的/発達
【ファシリテーター】	佐藤拓道/サブ:佃梓・馮馳(NPO法人リヘルテ)
【上映作品】	『PAPER?/かみ?』『大怪獣ゴゴン』

軽井沢で開催された映画祭のプログラムとして公開形式で実施されたワークショップです。公開形式だったので、障害のある方ない方、子どもから大人まで参加いただきました。よりよい鑑賞には、障害の有無も年齢も関係ないのだなと実感することができた機会でした。

子どもたちは「してはいけない」というストッパーが大人より少ないからか、自己表現がとても積極的です。それに引っ張られるように、大人たちも自然と自分自身の想像力をつかって表現していたように思えます。



主催 一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL  
 上映会パートナー まるっとみんなで映画祭実行委員会  
 助成 令和5年度キリン・地域のちから応援事業

# こぴあクラブ+ ライト学童保育クラブ

【実施日】	2024年2月7日
【会場】	ライト学童保育クラブ
【参加者】	ライト学童保育クラブ児童/放課後等デイサービス こぴあクラブ児童
【年齢層】	ライト学童保育クラブ:小学1年生～4年生 こぴあクラブ:小学4年生～高校1年生
【参加人数】	ライト学童保育クラブ:約90名/こぴあクラブ:7名
【障害内容(こぴあクラブ)】	重度心身障害児難治てんかん、筋ジストロフィー、ほか
【ファシリテーター】	栗田結夏
【上映作品】	『PAPER?/かみ?』

重度心身障害者の子どもが通う放課後デイサービスと、近隣の学童保育クラブとの合同開催のプログラムでした。参加人数も多く、カオスになるだろうという予測のうえで、ワークショップをはじめるまえに「ほかの人の音をよく聞くこと」「楽しいからといって大きい音を出すのではなく、映像やお題に対してどういう表現ができるかを考えること」「正解はないので、自由に表現すること」など、私たちからの願いを明確にするようにしました。

この回では、楽器づくりの材料のなかにブルーシートのようなひとりでは扱いがむずかしい大型の素材を使うようにしました。これは「木もれ陽の里」で実施した際の振り返りから生まれたアイデアだったのですが、大きな素材を用いることでほかの参加者との協力が必要になるので、新しいコミュニケーションが生まれるきっかけになります。



主催 一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL  
 上映会パートナー 放課後等デイサービスこぴあクラブ、ライト学童保育クラブ  
 助成 独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」